

## 「身体観の探究 ブッダは何を目指したか」



清水海隆（東京立正短期大学 学長）

わが国には天台・真言、浄土・禅・法華、そして旧仏教系など多くの仏教宗派があり、それぞれに特徴的な教義を展開し、中世以降に多くの信者を擁してきたことは周知の通りである。そして、それら諸宗派のおおもとを尋ねれば、今を遡ること約2500年、インド北部のガンジス河中流域において成立したシャカ（ブッダ）を開祖とする宗教（ブッダが説いた宗教／ブッダをめざす宗教＝仏教）に辿りつくこととなるが、シャカ「仏教」（＝初期仏教）は現在と同じように「仏教」と言われるが、現在とはその姿が異なっていたと考えられるのである。本講では初期仏教について、「原始経典」（漢訳・現代語訳）等を拠り所として、その姿を描写することとしたい。

さて、どの時代・どの地域においても「仏教」が追求することは悟りへの到達である。古来この悟りに2種が言われている。（肉体がのこっている）有余涅槃、・（肉体がなくなった）無余涅槃がそれである。シャカの最後を記した経文によれば、シャカの最後は病いであり、有余涅槃の状態では疾病に罹患することが理解される。また、後に整理される瞑想（定・禅定）は今日まで主要な修行法の一であるが、「座禅」だけでなく「歩行禅」も言われており、そもそもシャカ教団は「遊行」が基本であった。（時代は異なるが、わが国中世の道元の言「只管打坐」は有名であるが、他方「行住坐臥」のすべてが修行ともされる。）そもそも、シャカ「仏教」において、身体はどのように意識されていたのであろうか。原始経典に残された手がかりを見出してみたい。聴衆の方々が身体を考える上でのヒントなりを提供できれば幸いである。

### 清水海隆氏プロフィール

東京立正短期大学学長、立正大学名誉教授、博士（文学）

仏教社会福祉学を専門とし、仏教の教えと社会福祉との関わりや歴史的背景について研究。“他者への慈しみ”や“現代社会における宗教の意義”を中心に据えて研究・教育する仏教社会福祉学を代表する研究者の一人。

日本印度学仏教学会学会賞、立正大学蘊奥賞受賞

著書に『仏教福祉の思想と展開に関する研究』大東出版社、『仏教は災害をどのように捉えるか』（共著）ナカニシヤ出版など